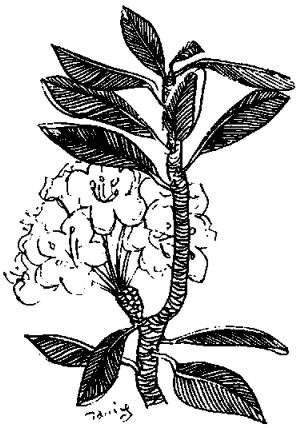


河跡湖と沖積堰止湖の風景

堀　淳一

宗谷本線の下り列車が塩狩峠を越えると、風景がぐんとのびやかになり、さあ、道北に入った、という思いで乗客の心を一段と爽かにする。そして、それをひときわひきたてるのが、折りおり車窓の遠く近くに姿を見せる天塩川の流れだ。深いところでは流れているのかいないのかわからないまるで沼のように静かな水面が、浅い瀬ではほんのかすかにさざなみ立ち、水泡をゆらめかせるだけで悠々と移ってゆく水が、人の心を何ともいえず和ませる。河原がほとんどないのも、日本ばなれのしたゆったりとおおらかな気分をさそう。堤防がなく、草原や森をじかに分けて流れる原始河川のおもむきの濃く残るところが多いのも、またうれしい。

流れているのかいないのか、と今書いたが、ほんとうに流れのないところも、実は少なくないのである。川の流れから取り残されて、いわゆる三日月沼、あるいは河跡湖となった部分だ。たとえば、智恵文駅を過ぎるとすぐ左手の樹間に見下ろされる川のような沼——智恵文沼がそれである。

これが河跡湖であることは、地図から一見明瞭だが、なおよく地図を吟味すると、もう一代古い河跡湖がかつてここにあったことがわかる。智恵文沼に囲まれた畑地を東西に横切る、一部に水のたまっている細長い凹地が、その名残りなのだ。

道北もさすがにさんさんと降る日ざしの暑い夏のある日、私は天智橋のすぐ西の、天塩川北岸の堤防に立っていた。南には、この堤防のために智恵文沼からもさらに切り離されて、川と堤防との間に小さく残っている河跡湖の切れはしが、濃緑のヤナギのしげみの中に、その影をモワモワと映した水色の鏡を、ポックリとはめていた。北はヤナギの樹叢からスクスクと伸びる三本のシラカバの向こうに光る、智恵文沼の東の枝。そして、歩を西へ進めるにつれ、智恵文沼は手前のジャガイモ畑の暗緑と、向こう岸の牧草地の輝くアップルグリーンとにはさまれた淡いブルーの帯へと移ってゆき、南の小沼はいつか姿を消して、手前の牧草地のメドウグリーン、その先のイモ畑の暗緑、さらに向こうの天塩川の空色、はるかかなたの森のつややかな緑の四色の重なりへと変わっていった。

そのめざましい彩りに眼を奪われていたら、メドウグリーンの中を、桃花色の上衣にバラ色のショートパンツの少女が、真っ黒な犬といっしょに駆けぬけていった。眼にしみる紅一点。思わず足を止めて彼女が小沼のほうへ消えてゆくのを見送ってから、私は北へ折れて堤防を降り、沼をめぐらす畑の中の道を、沼の北端へ向かって歩いていった。

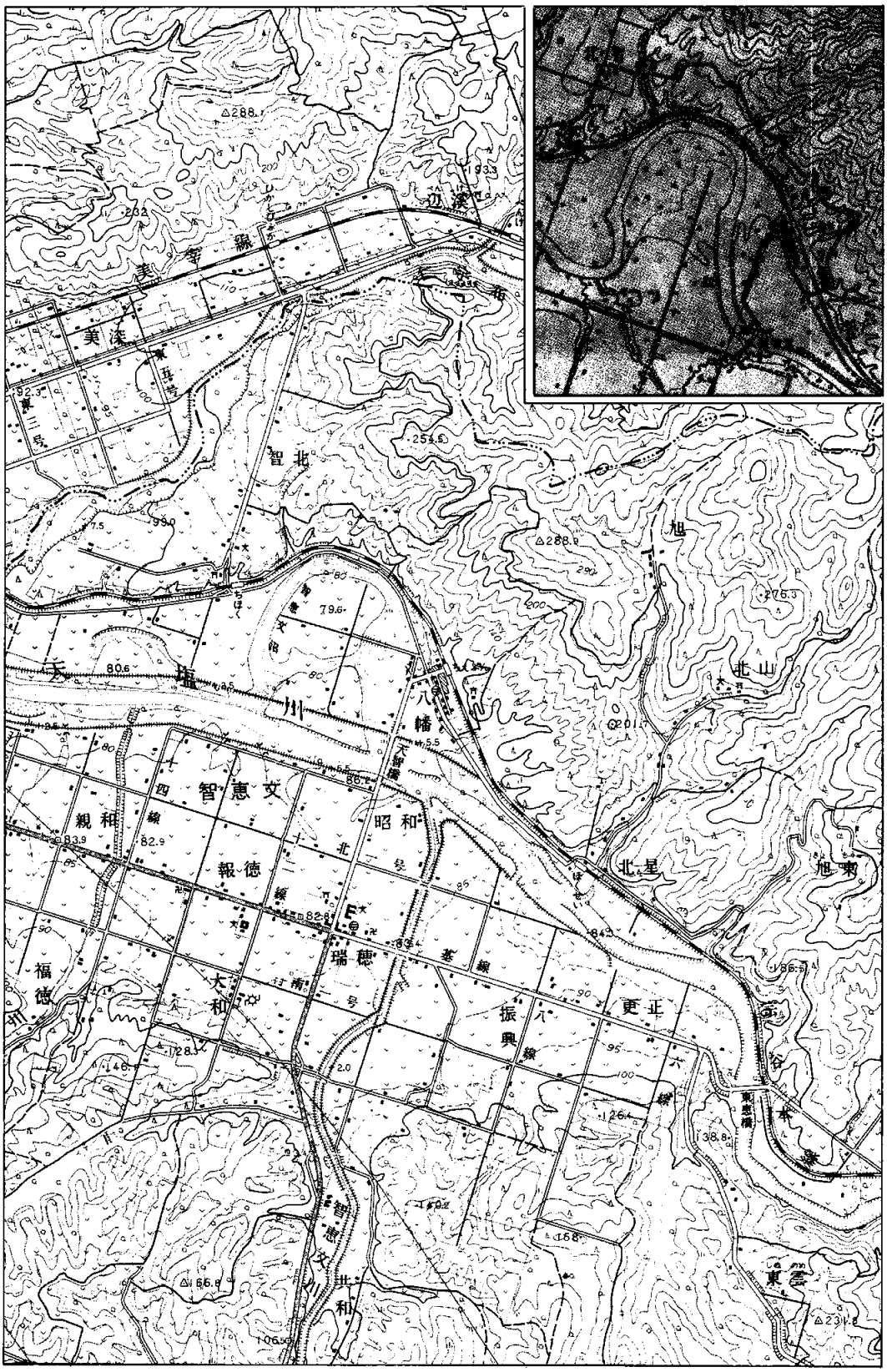
どちらを見ても、遠くの地平に這うように横たわるなだらかな山なみのはるかに望まれる畑地が、見渡す限りひろがっていた。が、西北西を眺めると、のびやかなカーブを描く畝筋が、行く手に向かって畑がほんのわずか低まってゆき、その先で再び高まっていることを、明瞭に示していた。それが地図に表現されている前記の凹地であった。

道は間もなくその凹地をよぎる。そこでは凹地は、鬱蒼と繁るヤナギの樹叢に覆われた湿地となっていたが、道の両側のヤナギの葉かげに、小さな沼が一つづつ、もうほとんど水草に覆われつくしてしまった水面を、ひっそりとのぞかせていた。

凹地の北に再び開ける広闊な畑では、スプリンクラーがけんめいに水を撒いていた。道路にまで降りかかるそのしぶきを浴びないように合間をねらって駆けたり急ぎ足で歩

地図2　5万分1 地形図「名寄」、昭和52年修正

地図1　地図1 5万分1　地形図「名寄」、大正11年測図



いたりしてそこを通りぬけると、やがて道は、沼の水辺へと森を分けて降りていった。

向こう岸も、宗谷本線を載せる高い崖をこんもりと覆う森。それをオリーブグリーンにとろりと映して、沼はふんわりとした静けさを、あたりいっぱいにみなぎらせていた。かすかにさざなみ立つ水の、森の影の縁では濃いオリーブグリーンと藍白との縞を、影の中ではきらめく光の筋を揺らせているたゆたいを、岸辺の水草やヤナギの葉の黒いシルエット越しに見る眺めは、さわさわとした風のそよぎとともに、夏の日ざしに照りつけられて歩いてきた私の心をホッと和ませ、涼しさにひたしてくれた。

水辺に腰を下ろして、水の風景のさそう何ともいえないやすらぎに身を任せていたら、突然、小鳥の囀りを割って、甲高い人の声が聞えてきた。驚いて見まわすと、向こう岸の森の切れたところで、いつのまにか、男の子が二、三人、たわむれ合っているのであった。そして、東のほうの水の上には、これもいつのまにか、一艘のゴムボートが浮いていて、釣人がそこから糸を垂れていた。そんな情景をほほえましく眺めやりながら、私はなおもしばらく、水辺に別れを告げるのを惜しんでいたのであった。

智恵文沼北端にて

智恵文駅への帰りは、沼の東の枝を埋め立ててつくられている近道を歩いてみた。そこはかつて川が中洲をはさんで流れていたところであるため、沼が二つ並んでおり、道はそれらを相ついで眺めてゆく。どちらも、ヤナギのしげみと岸辺の葦の、あるいはつややかな緑、あるいは黒々と濃いシルエットの中に藍白の水をおだやかに光らせて、ここでもこよなく心を和ませてくれた。道ばたに小さな公園があったが、トイレがつくられているだけであとは何もなく、ものものしく整備されたりもしていないのが快よかった。その一隅に、「智恵文沼の自然を守ろう」（メモしておかなかったので正確かどうか、自信はないが）と書かれた板が立っていた。今見てきた沼の風光やここの二つ並ぶ沼の味わいがこの通り守られるといいな、と思いながら、私は駅のほうへふらふらと歩いていった。無人駅ではないのに人気の全く感じられないさびしい駅が、ひっそり閑と日を浴びて、私を待っていた。

智恵文沼は、もう一世代前の古い河跡湖を伴っているという意味で、いわば二重河跡湖、あるいは親子河跡湖だが、数多い天塩川の河跡湖の中には、この他にも二重河跡湖がいくつかある。宗谷本線安牛駅の南の犬吼湖とその西の地図に名前のついていない三日月湖とのペアもそうだし、南幌延駅と上幌延駅の間にある三日月湖とそのすぐ東の小さな沼も、親子連れの河跡湖である可能性が強い。

その小さな沼のいかにも可愛らしい地図上の姿に惹かれて南幌延駅に降りたったのは、まだ空気の肌にしみてつめたい五月の末の、雨あがりの午後だった。

冬枯れのおもむきすらまだところどころに残る北の曠野をよぎって、私は上幌延駅へ向かって歩いていった。右手には、ボソボソとした背の低い林を載せるのっぺりとした丘陵がつらなっている。さっきから、丘陵が時々とぎれるたびに、谷の奥に、ナマコの背中のように丸味を帯びた一段と高い丘の列が、顔をのぞかせていたのだが、南幌延駅のあたりでは、ペンケ、パンケ両オートヌオマップ川が広い埋積谷をつくっているために、丘陵が千切れ千切れになっており、二つの川の間に細々と延びる高さ四〇メートルほどの痩せた尾根が、森のように横たわっているにすぎないので、ことにナマコ山がよく見えた。それは、雄信内から北々西へ向かって延びる、硬質の頁岩（けつ）からできているために侵食がおくれて、ひときわ高く残っている鍋状丘陵列なのだった。

そんな構造地形のおもむきを味わい、折りおりカメラを向けながら、パンケオートヌオマップ川を渡ると、左手の笹原のむこうに、牛が点々と草を喰む鸚緑の牧草地がはるばるとひろがり、その果てを限る天塩川の堤防の上に、産士丘陵が納戸色に沈んで横たわっていた。まず切り通しを抜けたところで西へ折れ、ぼうぼうとした草原を膝まで濡れながら三日月湖の南側にある窪地――すなわち昔の天塩川の河床へ降りてゆくと、土が次第に湿って靴が埋まりだすとともに、草原はヤナギの樹叢へと移っていった。そして、そのからみ合う枝の間から、向かいの崖を覆う若葉を映してオリーブイエローに光

る沼――すなわち昔の天塩川の名残りが、チラホラと顔を出したのであった。

それをしばらく佇んで眺めたあと、また濡れそぼつ草を分けてもとの道にもどり、宗谷本線のレール沿いに歩いてゆくと間もなく、左手の草原の中に、めざす小沼がポッカリと眼をあけていた。

叢をかきわけて岸まで降りてみたら、沼のぐるりにはトクサがびっしりと生えており、そのオリーブグリーンの輪にすっぽりと隈取られて銀白に光る水面に、対岸のヤナギの木立ちが、かすかに揺らぐ影を落としていた。

それは、澄んだ明るさの中に一抹の幽愁を秘めた、静謐そのもののような沼であった。

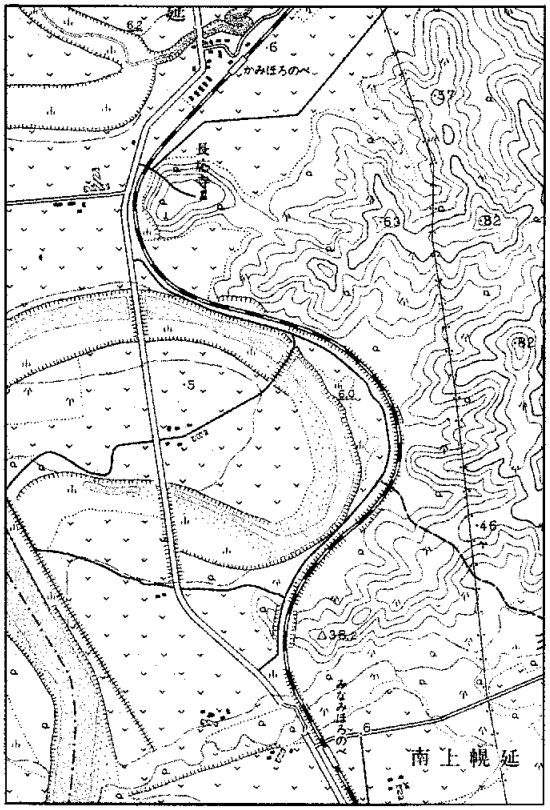
このほかの天塩川の河跡湖はまだ訪れていないけれども、前記の二つに勝るとも劣らない味わいを、少くともその大部分はもっているにちがいない。いうまでもなく、二重河跡湖ではないものも。

石狩川の両岸にも、天塩川のそれと甲乙ないぐらいに数多くの河跡湖がある。沿岸の開拓およびそれに伴う本流の直線化がより早くから進められたために、それらは概して天塩川の河跡湖よりも古く、したがって自然の埋め立て――湿原化・樹叢化がより著しい。また、干拓や公園化などの人工の加えられているものも多い。二重河跡湖も、おそらくそのために、ここではほとんど見られない。しかし、だからといって、石狩川の河跡湖が天塩川のそれらよりも風光において劣るわけでは決してない。ニュアンスはいくらか異なるにしても、やはりその大部分は、それぞれの捨て難いよさをもっているのである。

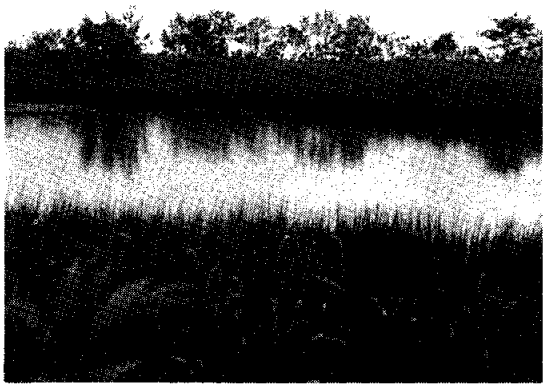
五月末の、雨もよいの朝、そんな沼たちのいくつかを見ようと、私は浦臼駅で札沼線の列車を降りた。

国道を北へ上ってゆくと、三キロほどでゆるい上り坂になる。上りつめたところの右手には、小公園ふうの細長い草地が続くが、そのきわは急崖で東へ落ちており、その直下に沼がある。この急崖はかつてここを蛇行していた石狩川の攻撃斜面、沼はその蛇行の名残りである鶴沼という河跡湖である。崖っぷちから見下ろす沼は、向こう岸のめざましい鶸緑の草原と、崖の上に生えているナラ、カエデ、ヤナギ、ヤマブキ、ハナウドなどの枝、葉、花がとりどりの新緑と山吹色と白で織りなす形と色の図柄との間に、ほんのかすかにさざなみ立つだけの水面を、銀白色にはめこんでいた。小さく平らな中の島が一つ、それに数多の藻のような水草のかたまりが、これもまたあざやかな鶸緑を湖面に散らし、かなたの草原の上には、夕張山地北部の山なみが、濃淡のスモークブルーの重畳を、シルバースカイの空の下に横たえていた。

地図3　2万5千分1地形図「安牛」、昭和54年修正測量



天塩川二重河跡湖の小沼



なかなか心にくいその構図にひとしきり眺め入ってから、ヤマブキの花が繚乱と咲く崖の小径を降りてゆく。その先は、はるばると空の広い、岸辺の公園であった。公園自体は平凡であった。しかし、そのなまじなおもむきや造作のないところが、岸辺に降りてみれば広さと明るさが身上だなあ、と思わせるこの河跡湖にはふさわしいのだった。中でも、その広さを妨げるゴテゴテとした建物のないのがいい。折からパラついてきた雨をよけて、私は眺めを邪魔しない素朴な四阿の下で昼食をとりながら、はろばろとした沼の風光をたのしんだのであった。

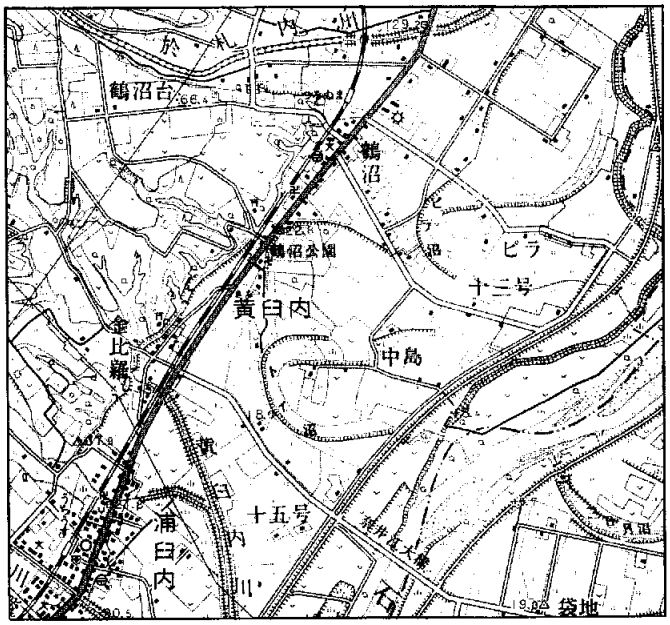
食後、小降りになった雨をついて、私は鶴沼の東方にあるピラ沼へと向かった。

地図から容易にわかるように、鶴沼は、もとはもっと大きくて三日月形をしていた河跡湖が、埋め立てられ、水田化されて縮まったもので、恰好もちょっと見には河跡湖らしくない円形である。それに対してピラ沼は、まだ原型をよく残していて、西岸の崖、すなわちかつての攻撃斜面の上から見渡すと、左手かなたから大きくカーブして眼の前に近づいて来、また右手かなたに大きくカーブして遠ざかってゆくという、かつての川の流れそのままの、典型的な三日月沼のかたちを印象的に見せてくれた。崖の上はイタドリとササの叢にヤナギの木立ち。それを通して眺め下ろすさざなみ一つないひろびろとおだやかな水面が、アイスホワイトの中に向こう岸の木立ちや叢をオリーブイエローにほわほわと逆立ちさせている風光は、遠くの雲の下にくすんだブルーを濃く淡く重ねる夕張山地の姿とともどもに、私の心をさわさわと広くしてくれるのであった。

ピラ沼のほとりを離れて鶴沼駅へ向かうころすっかり雨をおさめた空は、新十津川駅で列車を降りた時には、折りおり薄日を洩らしていた。その空の下に連なるピンネシリ、待根山から隅根尻山などの樺戸山地の残雪をいただくピーク群や、はるか遠くの暑寒別連峯を水田のかなたに振り返りふり返り、東へ向かって歩いてゆくと、間もなく、石狩川本流の堤防のすぐ外に本流と平行に延びている、名のない河跡湖の岸に突きあたった。沼は、向こう岸の堤防と牧草地の眼ざめるばかりの鸚緑と、手前の岸のヤナギやイタドリの萌黄色のむらがりとの間に、悠々と移ってゆく雲を千草鼠、浅葱鼠、藍白、そして銀白のまだらに映す水を、とろりと、しかしはろやかに湛えていた。一直線の堤防上面の上に、音江山とイルムケップ山が、二つのゆるいピークを両端に立てた、カルデラの断面のような姿をのぞかせているのが面白かった。沼の南端近くでは湿原化が始まっていて、水草がしげみといえるほど密に生えていたり、一部が泥地化してヤナギのひと群れを載せていたりした。しかしそれもまた、はろやかな沼の風景に変化を添えていっそう興を深くしている、と私は思った。

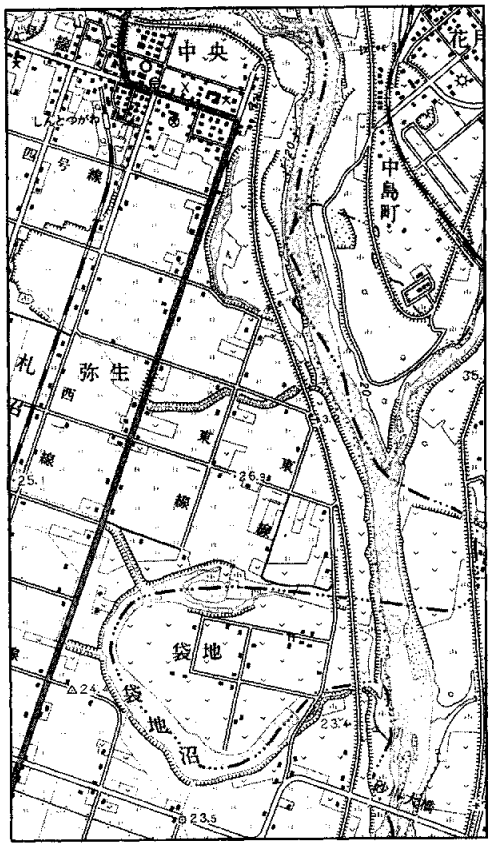
この無名沼の南方二キロのところにある袋地沼に、次に私は行ってみた。そこでは湿原化がいっそう進

地図4　5万分1地形図「砂川」、昭和55年第2回編集



鶴　沼

地図5　5万分1 地形図「滝川」、
昭和56年第2回編集



ピラ沼

んで、沼の北端部分はもうすっかり、沼というよりは水のゆたかな湿原――浅い水たまりの中からいちめんに密に伸び出した葦が、近くではその茎の暗い海老茶と葉の明るいアップルグリーンと水のきらめきとを繊細な光と色と影のパターンにみごとに織り上げ、遠くでは水を全く覆いかくして、まぶしい鸚緑のじゅうたんを展べている、一望はるかな湿原となっていた。あるいは新緑のめざましい葉を輝かせ、あるいは立ち枯れて黒っぽい裸の枝をひょろひょろと突き出しているヤナギの木立ちの点々と立つ、そんな湿原のかなたに、スモークブルーの樺戸山地と、同じくスモークブルーにかげる雲と白銀に光る雲とのまだらが美しい空とを望む風景は、明るさとわびしさを微妙に交錯させて、太古への想いをはろばろとさそうのであった。

こうして、古くて湿原化の進んだ河跡湖も、比較的新しくてまだ流れている川のおもむきを保っている河跡湖も、ともども、平坦で画一的な耕地化の支配する平野の中で、それぞれに味わい深い情感を漂わせて、人々の心のオアシスとなっているのである。天塩川、石狩川以外の川についても、いうまでもなく、このことは変わらない。

北海道の平野部には、河跡湖とならんで、海跡湖と沖積堰止湖も多い。これらの多くも、河跡湖と同じようにはろばろと静謐な、しかし河跡湖とはまたひと味ちがうおもむきをそれぞれ漂わせて、そのやすらぎに身をひたそうとする人々を、ひっそりと待っている。ここではその中、沖積堰止湖のほうをいくつかとりあげてみよう。

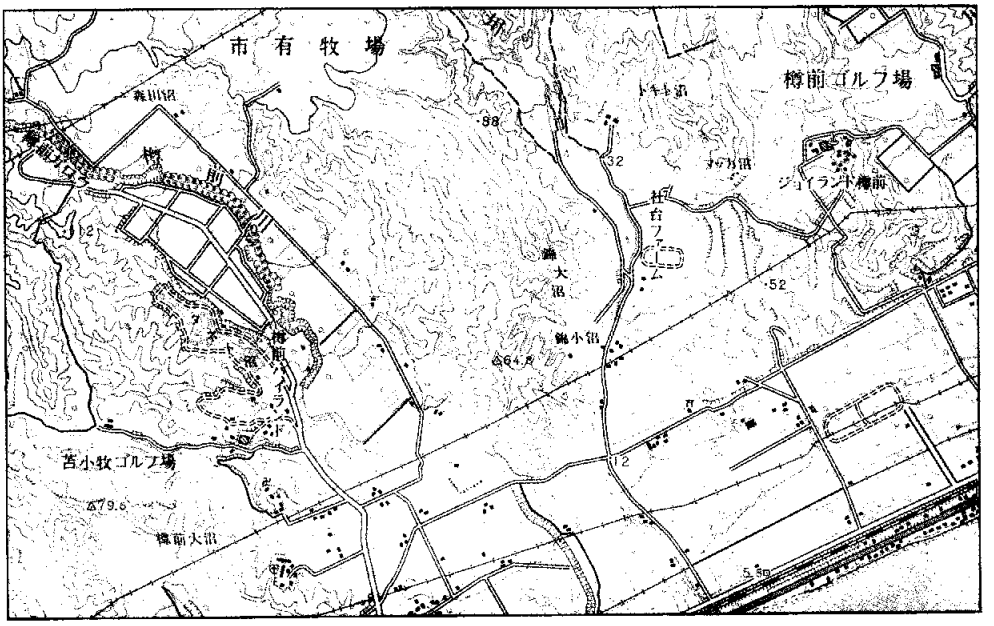
樽前山の南から南西にひろがる平らな高原の裾には、ことに沖積堰止湖が多い。この高原は、もっぱら、更新世にはげしく活動した支笏火山などの古い火山の噴出物からなる台地だが、その裾は覓生（おぼ）川、樽前川、別々（べつべつ）川、社台川によって開析されて、これらの川の広い谷の間にはさまれてひょろひょろと延びる、やせ尾根の一群と化してしまっている。そのやせ尾根の横腹を、こまかい谷がさらにボロボロに切り刻んでいるのだが、その谷あいに、小さな沼がたくさんある。これらが、前記の四つの川の自然堤防によって

袋地沼北端にて

こまかい谷を下る水が堰き止められてできた、沖積堰止湖なのである。

ふたたび夏のさかりの一日、私はそんな堰止湖の一つであるマッカ沼のほとりに立っていた。

地図6　5万分1 地形図「白老」、昭和54年第2回編集



覚生川の東側のやせ尾根にくいこむ二股に分れた谷をすっぽりとひたす沼は、つややかな常盤色の森にこんもりと覆われた、モコモコと丸っこい山腹にひっそりと囲まれて、そうでなくても人里離れた静かな山ふところを、いやが上にも静寂に包んでいた。それは、河跡湖の明るくひろやかな静けさとはひと味ちがった、閉じて奥まった空間にみなぎる静けさであった（河跡湖の中にも、智恵文沼のような、森に包まれた閉じた静寂がゆかしい例もあるけれども）。沼の色あいも捨てがたかった。オリーブグリーンと草色の絵具を微妙にぼかしながら混ぜて、パレットにとろりと流したように、森を映す水面。その中に白緑のきらめきをいちめんに散りばめている浮き草の大群。そのまた別のところに、刷毛をサッサッと縦に動かしながら描いたようなやわらかいピーグリーンの帯を曳く葦のしげみ。空を映してにぶく光るシルバースカイの水。軽やかな若緑を岸辺に揺らすヤナギの葉——

沼の出口のところには、奇妙な形をした別の小さい沼——草茫々の中の島をぐるりと輪型に囲む、ほとんどすき間なく浮き草で覆われた水面があった。濠に取りまかれた小さな砦の遺跡のようなそのおもむきは悪くはなかった。しかし、古い地図には描かれておらず、東方の台地の上に樽前ゴルフ場ができ、「ジョイランド樽前」なるものが姿を現しはじめて、それらと沼の南の社台ファームを結ぶ道が開かれてから地図に登場するところを見ると、これはどうやら遊園地か何かにするために人工的につくられたものであるらしい。それが未完成のまま放棄されて荒れ果てているのだろう、と思われた。

マッカ沼

その小沼を一巡してから、覚生川の平らな谷を埋めて漠々とひろがる草原をよぎり、これも生いしげるにまかせた草の中にポツリポツリと残る廃屋とサイロの廃址のわびしい社台ファームの脇を通って、私は次に錦大沼・錦小沼を訪れてみた。

この二つの沖積堰止湖を囲む一帯は、苫小牧市の管理する錦大沼公園となっている。沼は二つながら、マッカ沼のそれより

も一段と奥深く山ふところに入りこんだ谷に水を湛える、幽邃な沼だ。水深もかなりあるらしく、湖面に浮き草がなくて、シルバーグリーンの水が谷幅いっぱいにひたひたとさざなみ立っているのが、幽邃さをいっそう深めている。沼のまわりをめぐる遊歩道の一部が、湖畔の湿原の中の桟道や、ダケカンバの美しい疎林をぬう石だたみの道となっているのもうれしい。公園の入口はちょっとした広場になっているが、トイレといくつかのベンチがあるだけで、余計な建物は一切なく、また下は土と草だけでコンクリートで固められたりしていないのもいい。

これと対照的なのが、となりの樽前川の谷にあるタネト沼だ。これは樽前ハイランドと称する遊園地になっているのだが、まず入園料を払わないと入れない、というのが気に入らない。萬人のものであるべき自然景を私有物にし、それをダシにして金もうけをしようという心性がイヤらしい。しかも、中には売店はいうまでもなく、町の中の遊園地と同じような遊戯施設がいろいろとあるらしく、また自然の風致をブチこわすラウドスピーカーの音も流されているらしい――らしい、というのは、こういうところは私は大嫌いで、以前に樽前大沼（この沼はマッカ沼や錦大沼・小沼と同じようないい沼だ）を見に行った時、入口まで来ながら中に入らずに帰ってしまって、確認していないからだが。それで、マッカ沼と錦大沼・小沼を訪れた日にも、ここは敬遠して、樽前大沼をもう一度見ようと、素通りしてしまったのであった。

錦小沼東岸の遊歩道

遊園地が悪いというのではないけれども、なぜせっかくの人里離れた自然の静けさの中にそれを持ちこまなければならないのか、私にはわからない。公園化ならば、錦大沼公園のように、自然の風光と静けさを損わずに、それらにたっぷりとひたってたのしむことができるようにしてくれるのなら、大いに歓迎するのだが。マッカ沼も、もし遊園地の造成が完成していたならば、タネト沼と同じ運命におちいっていたのであろうか。そうだとすれば、遊園地化が放棄されてよかった、と思うのである。

今のところ、河跡湖の場合には幸い、タネト沼のような事態は起きていないようである。茨戸湖や前述の鶴沼のほとりには人工的な施設が若干あるけれども、大きく自然景を損なうには至っていない。海跡湖についてもほぼ同様なことが言えるであろう。何れにしても、今まで自然のままに残されているそれぞれに情趣のある沼や湖たちには、できるだけ余計な手を加えないか、加える場合には自然を殺すのではなく、生かすように加えてほしいものだ。

最後に御参考までに、これまでに私の書いた河跡湖、海跡湖、沖積堰止湖に関する記事を挙げておく。御一読いただければ幸いである。

クッチャロ大沼、クッチャロ小沼、モケウニ沼、第一沼、小沼（天北原野）。「オホーツク――春と秋の心象」（そしえて）五二―五九ページ。

濤釣沼、ニクル沼（斜里海岸）。同前一四―一五ページ。

ポント沼（能取湖岸）。同前二〇ページ。

月沼、ウツギ沼、新沼、浦臼沼（石狩川畔）。「地図の風景・北海道篇1」（そしえて）一〇五―一一〇ページ。

シラルトロ沼（釧路湿原）。「地図の風景・北海道篇II」（そしえて）八五―八八ページおよび「旅あの日この日」（スキージャーナル）一三五―一四〇ページ。

火散布沼、藻散布沼、渡散布沼（霧多布原野）。「旅あの日この日」（スキージャーナル）一六二―一六七ページおよび「地図の風景・北海道篇II」（そしえて）八〇―八四ページ。

ポロ沼（天北原野）。「地図から旅へ」（毎日新聞社）二〇六―二一三ページ。

掲載地図は建設省国土地理院発行のものである。

（エッセイスト、地図研究家）